

不思議現象に対する態度の発達

小 城 英 子

坂 田 浩 之

川 上 正 浩

Development of attitudes towards paranormal phenomena—————

The purpose of this study was to examine the development of attitudes toward paranormal phenomenon, critical thinking, and differences in them between junior high school and university students. The Attitude towards Paranormal Phenomena Scale and Critical Thinking Disposition questionnaire were administered to junior high school, high school, and university students and their scores were compared. All participants were female and were from Catholic schools of the same educational foundation. The results showed that in older students, the cluster "Group Enjoying Paranormal Phenomena" decreased and the cluster "Skeptic Group" increased. Further, the score of "Enjoyment of Paranormal Phenomena" and "Skepticism" decreased among older students in the "Ordinary Group" cluster; "Inclination towards Augury and Magic" increased in older students in the cluster "Group Believing in Paranormal Phenomena." However, there was no relationship between age and attitudes towards paranormal phenomena in the "Skeptic Group" and "Group Enjoying Paranormal Phenomena" clusters.

Key Words: Paranormal Phenomena, Beliefs, Attitudes, Adolescence, Development

要 約

本研究の目的は、中学生、高校生、大学生の比較を通じて、不思議現象 (paranormal phenomenon) に対する態度がどのように発達するのかを検証することであった。調査対象者は、すべて同系列のカトリック系学校に通う女性であった。調査の結果、年齢層が上がるとともに不思議現象を娯乐的に楽しむ「娯乐的享受層」が減り、不思議現象に対して懐疑的な「懐疑層」が増えることが示唆された。また、年齢層が上がるとともに「一般層」において「娯乐的享受」と「懐疑」の得点が低下、不思議現象を信奉する「不思議現象信奉層」においては年齢が上がるにつれて「占い・呪術嗜好性」の得点が上昇するが、一方で「懐疑層」と「娯乐的享受層」においては年齢層による差は見られなかった。

キーワード；不思議現象，信奉，態度，青年期，発達

問題と目的

心霊現象や占い、UFO、超能力など、現在の科学ではその存在や効果が立証されないが人々に信じられていることのある現象は、総括して「不思議現象」と呼ばれる (菊池, 1997)。日本で不思議現象信奉の研究が盛んにおこなわれるようになったのは1990年代後半である。1995年3月の地下鉄サリン事件を発端にオウム真理教事件が表面化し、マインド・コントロールや破壊的カルトなどの文脈において、不思議現象を信奉する心理に関心が集まったことが影響していると考えられる。海外でも多くの研究が行われており (Tobacyk, & Pirttilä-bachman, 1992など)、不安傾向、外的統制傾向、回帰性などについては、国内外のどの研究においてもおおそ一貫して不思議現象信奉との関連が見出されている。

不思議現象信奉に関する研究の多くは成人を対象としているが、子ども

や青少年の発達という視点からの関心も高い。中学生を対象に行われたものには、戸田・南（1993）の研究がある。この研究では、占い指向と自己効力に焦点を当てており、中学生が関心を持つ占い領域は「恋愛運」、「金運」、「全体運」などであること、回答者の43.1%が「良いものも悪いものも含めて占いを信じる」と回答していること、36.9%が占いを「よくする」、「ときどき」と回答していることなどが明らかにされている。また、自己効力の高い生徒ほど占いを利用するという、先行研究とは逆の結果が得られているが、この研究で用いられている「自己効力」の測度が、認知や感情レベルではなく、異性とのコミュニケーションのために行動レベルで具体的にとる方略（数人で話す、挨拶をするなど）であることから、むしろ占いに責任帰属することによって、積極的な行動をとりやすくなった可能性が考えられる。

高校生を対象に行われたものには、田丸・今井（1989）や松井（1997）の研究がある。田丸・今井（1989）では、高校生女子は男子よりも占いの知識を豊富に持ち、積極的に接触し、その内容を信頼する傾向が強いことが示されており、また、異性や友人などの人間関係に対する不安、災害や自分の死・健康などの被害に対する不安、倦怠感や頭痛や食欲不振といった体調不良の不安など、さまざまな不安の程度が占いに対する態度や信頼感と有意な相関を持っていた。松井（1997）の研究でも、高校生女子は男子よりも占いやおまじないを信じる傾向が強く、また、「同調性」と不思議現象信奉に関連があったことから、友人に合わせて占いなどの流行に乗っている側面が指摘されている。さらに、「科学限界感」を強く抱いている高校生、SF番組やアニメ番組をよく視聴している高校生ほど不思議現象を信奉しやすく、特に男子ではお笑いや音楽など、テレビの娯楽の影響を強く受けている人ほど、不思議現象の信奉程度が高いことが示されている。

また、中学生や高校生という区分ではないが、渡辺・榎本・松本（1980）は、「コックリさん」、「キューピット」、「直霊」、「エンゼル」と称される占い

遊びを契機として、幻覚妄想状態や憑依状態、人格変換、夢幻状態に陥り、心因性の精神障害を発症した複数の思春期女性の症例を報告しており、その背景に学校や家庭での疎外感、知的レベルや環境適応力の低さ、憑依状態に対する周囲からの賞賛、養育者の迷信的態度などを指摘している。

以上の研究は、中学生や高校生の不思議現象信奉を扱っているものの、他の年代と比較していないため、その信奉の実態や規定関係が中学生や高校生に特有のものであるのか、あるいは、すべての年代に共通するものであるのかは不明である。たとえば、不安との関連や性差は大学生以上の成人を対象とした調査でもほぼ一貫して見出されており（小城・川上・坂田、2006）、青年期の特徴を解明するためには異なる年齢層との比較が必要である。

他の年代と直接に比較した研究には、神館（2003）が高校生と高齢者を対象に行った調査がある。高校生の方が高齢者よりも超自然現象信奉尺度（中島・佐藤・渡邊、1993）の得点が高いという結果が得られているものの、単純比較にとどまり、その背景要因までは考察されていない。

中高生を対象とした調査ではないが、性差と年代差に着目した松井（2001）では、無作為抽出された幅広い年代層のサンプルを対象に調査を行い、不思議現象信奉が若い層に特徴的な現象であることを明らかにしている。この研究では、「占い」や「おまじない」などの「占い系」は20代女性層を中心に女性によって信奉されており、「UFO」、「超能力」などの「疑似科学系」は若い男性層によって信奉されていることが示されている。一方、50-60代の高齢層は、「神仏の存在」、「神社などのお守り」などの「旧来宗教系」以外の不思議現象を信奉していない傾向が認められている。

しかし、この松井（2001）の結果は、年代差よりも世代差である可能性が高い。この研究の調査時（1996年）における高齢層は、神仏や天皇の崇拜がまだ色濃く残っていた時代に幼少期を過ごしており、「旧来宗教」系になじみがあること（斉藤、1981、1982）、一方、調査時の若年層が信奉する「疑似科学」系のUFOや超能力のブームや、「占い」系の一つであ

る血液型性格判断のブームが起きたのは、この世代が幼少期～児童期にあった1970～80年代であること（小城・坂田・川上，2007a；白佐・井口，1993）などから、それぞれの世代が育ってきた時代背景の影響が強いと考えられる。

このことを踏まえて、高校生と高齢者を比較した前述の神館（2003）を振り返ってみれば、不思議現象信奉の測度として用いられている「日本版超自然現象信奉尺度」（中島ほか，1993）は、「迷信因子」，「霊因子」，「超能力因子」，「超生命・超文明因子」の4因子で構成されており，どちらかといえば，若年層になじみ深い内容が多い。また，本来は4因子別に高校生と高齢者の比較を行うべきであるが，神館（2003）には集計に関する記述がなく，4因子すべてを合計した得点を分析に用いていると推察されることから，一律に得点の高い高校生の方が不思議現象に対して肯定的であると判断することはできない。

海外の研究においても，中学生と高校生の調査対象者は同一の学校に所属しているのに対して大学生の調査対象者は複数の大学に分散しているように，横断調査で調査対象者の家庭環境や社会的地位，学力といった属性が統制されておらず，年齢による差異なのか，属性による差異なのか定かでないことが指摘されており（Irwin，1993），不思議現象信奉の発達の変化については信頼性の高い研究知見がほとんど見られないのが現状である（Irwin，2009）。

以上のことを踏まえると，児童期から思春期・青年期の不思議現象信奉は，多くの関心が寄せられているにもかかわらず，他の年代と比較するという視点からはほとんど検証されていない。また，高年層まで含めた幅広い年代を対象とした調査は，それぞれが育ってきた時代によって信奉対象の質が異なるため，横断的な実態を示すにとどまり，発達的な知見をもたらすものではない。さらに，不思議現象信奉には性差が大きい（松井，1997，2001など）ことを踏まえると，男女を区別して分析する必要がある。小城・坂田・川上（2008a）は，不思議現象に対して，信奉行動だけでなく，

認知や感情も含めた包括的な態度を測定する尺度 (Attitudes towards Paranormal Phenomena Scale = APPlE) を作成し、不思議現象に対する態度が「占い・呪術嗜好性」, 「スピリチュアリティ信奉」, 「娯楽的享受」, 「懐疑」, 「恐怖」, 「霊体験」の6つの下位尺度から構成されることを見出している。また、これらの下位尺度を用いたクラスタ分析の結果、すべての得点が中間的な「一般的信奉層」、不安傾向や自己認識欲求が強く、不思議現象を積極的に信奉している「不思議現象信奉層」、不思議現象を否定的にとらえる「懐疑層」、不思議現象を信奉するというよりは、周囲との調和を重視して会話のツールやエンターテインメントとして楽しむ「娯楽的享受層」の4層が抽出されている。

また、高校生女子と大学生女子のAPPlE得点を比較したところ、高校生女子の方が不思議現象に対して肯定的な態度を有していたが、深い心性に根づいた信奉というよりは娯楽的な志向性が強いことが認められている(小城・坂田・川上, 2009a)。しかしながら、この研究では、高校生女子のサンプルがカトリック系の特定大学のオープンキャンパスにおいて「不思議現象の心理学」という公開講座の参加者で、属性が多様である上に不思議現象の講義に関心を持って集まっており、さらに講義の影響を受けた可能性が高いのに対して、大学生女子のサンプルはカトリック系特定大学の1年生のみでサンプルの偏りが大きかったこと、サンプル数の少なさから層別の分析を行っていないことが問題点として挙げられる。

そこで本研究では、家庭環境や社会的地位、学力、性別、宗教意識等の属性において、ほぼ同質と見られるカトリックを母体とする同系列の中学・高校・大学の女子生徒・学生を比較し、青年期のお不思議現象に対する態度の変化を量的に比較すること目的とする。

調 査

方 法

調査対象者

調査は、(a)中学生226名（1年生66名，2年生75名，3年生85名，平均年齢13.9歳， $SD=0.87$ ），(b)高校生159名（1年生80名，2年生79名，平均年齢16.3歳， $SD=0.63$ ），(c)大学生435名（1年生242名，2年生100名，3年生61名，4年生32名，平均年齢18.9歳， $SD=1.16$ ），計820名（すべて女性）を対象に行われた。なお，今回の調査対象者の所属する中学校・高校・大学は，カトリックを母体とする同一の学校法人によって経営されており，中学・高校は一貫教育であること，高校卒業者の多くが大学へ進学することから同質性が高く，横断研究でありながら，ある程度は縦断的な解釈も可能と考えられる。

調査時期・調査方法

(a)と(b)は2010年1月－2月に，調査実施と質問紙回収を学校に依頼し，(c)は2010年4月に，講義時間中に担当教員によって実施された。回答時間は約15分であった。

調査内容

(a)－(c)に共通していたのは，APPlE55項目（小城ほか，2008a）であった。いずれも「あてはまる」（5点）－「あてはまらない」（1点）の5件法で回答を求めた。質問紙にはその他の項目も含まれていたが，本稿では扱わない。

結 果

回答者の分類

先行研究に倣ってAPPlEの6下位尺度の得点を算出した。各尺度の信頼

性係数はTable1に示す。次に、APPLEの6下位尺度を投入してクラスタ分析を行い、全回答者をすべての得点が中間にある「一般層」、不思議現象に肯定的な態度を有する「不思議現象信奉層」、不思議現象に関心が低く、「懐疑」のみが突出して高い「懐疑層」、「不思議現象信奉層」に次いで不思議現象に肯定的だが、「娯楽的享受」が高く、「恐怖」が低い「娯楽的享受層」の4群に分類した（Table 2）。分布の偏りを検討するために年齢層とクラスタによるクロス集計を行ったところ、有意な偏りが見られた（ $\chi^2_{(6)}=42.90, p<.001$ ）。残差分析の結果、「懐疑層」には中学生が少なく（ $d=-3.49, p<.01$ ）、大学生が多かった（ $d=4.39, p<.01$ ）。また、「娯楽的享受層」には中学生・高校生が多く（ $d=3.84, p<.01; d=2.59, p<.01$ ）、大学生が少なかった（ $d=-5.36, p<.01$ ）（Table3）。

Table 1. 各尺度の α 係数（年齢層別）

	中学生	高校生	大学生
占い・呪術嗜好性	.900	.929	.926
スピリチュアリティ信奉	.873	.888	.908
娯楽的享受	.814	.830	.842
懐疑	.767	.779	.716
恐怖	.790	.725	.741
霊体験	.569	.664	.655

年齢層によるAPPLEの比較

年齢層とAPPLEおよび批判的思考との関連を検討するために、クラスタ別に年齢層を独立変数、APPLEの6下位尺度を従属変数とする一元配置分散分析と下位検定（Tukey法）を行った（Figure 1～4）。その結果、APPLEについては、年齢層が上がるとともに「一般層」において「娯楽的享受」と「懐疑」が低下、「不思議現象信奉層」において「占い・呪術嗜好性」が上昇する傾向が認められたが、「懐疑層」と「娯楽的享受層」においては年齢層による有意差は見られなかった。

Table 2. 回答者の分類

	N	占い・呪術嗜好性		スピリチュアリティ信奉		娯乐的享受		懐疑		恐怖		霊体験	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
第1クラスタ (一般層)	310	2.80	0.59	3.45	0.53	2.84	0.63	3.27	0.69	2.17	0.60	1.79	0.59
第2クラスタ (不思議現象信奉層)	143	3.54	0.60	4.05	0.50	3.61	0.61	2.92	0.60	3.18	0.57	2.34	0.78
第3クラスタ (懐疑層)	152	1.87	0.48	2.39	0.63	1.99	0.62	3.39	0.87	1.47	0.48	1.36	0.43
第4クラスタ (娯乐的享受層)	113	3.26	0.80	4.10	0.56	3.90	0.68	2.07	0.72	1.76	0.57	2.42	0.82
$F_{(3714)}$ 下位検定		208.71*** 2>4>1>3		296.24*** 2=4>1>3		256.33*** 4>2>1>3		93.331*** 3=1>2>4		250.58*** 2>1>4>3		85.04*** 2=4>1>3	

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 3. 各クラスターの割合

	一般層	信奉層	懐疑層	娯楽層	計
中学生	70 (39.5)	42 (23.7)	21 (11.9)	44 (24.9)	177
高校生	58 (45.0)	21 (16.3)	20 (15.5)	30 (23.3)	129
大学生	182 (44.2)	80 (19.4)	111 (26.9)	39 (9.5)	412
計	310 (43.2)	143 (19.9)	152 (21.2)	113 (15.7)	718

単位：人（カッコ内は行比率）

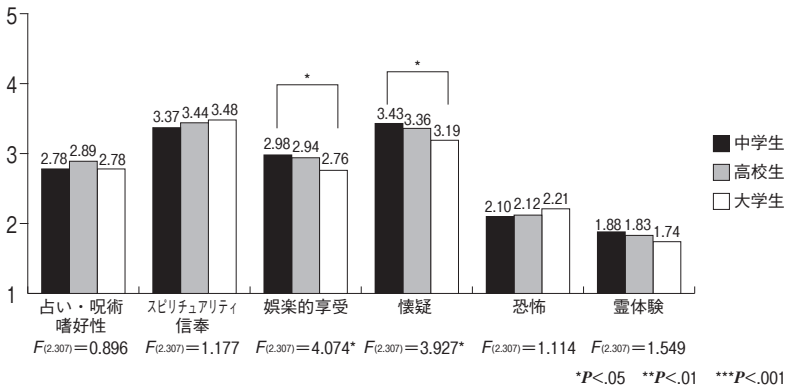


Figure 1. APPIにおける年齢層の比較（一般層）

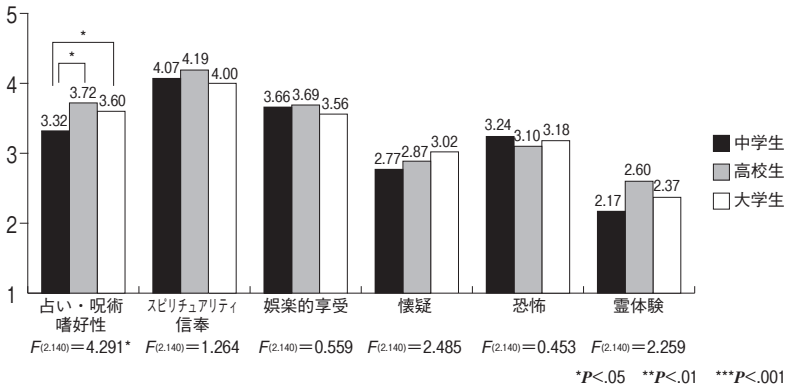


Figure 2. APPIにおける年齢層の比較（信奉層）

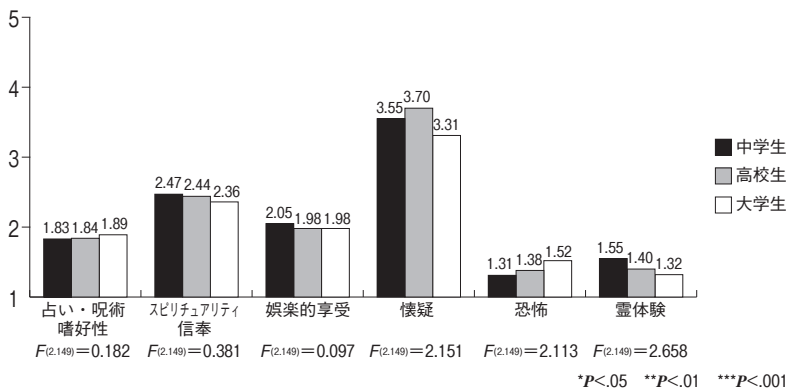


Figure 3. APPIにおける年齢層の比較（懷疑層）

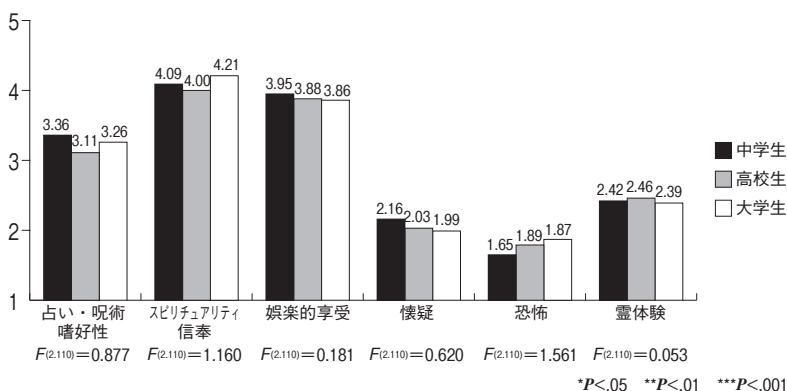


Figure 4. APPIにおける年齢層の比較（娯楽的享受層）

考 察

全体としては、年齢層が上がるともに不思議現象を娯楽的に楽しむ層が減り、懷疑にとらえる層が増えることが示唆された。思春期のころには不思議現象がコミュニケーションのツールとして利用されていたが、成長とともに視野が広がり、不思議現象を批判的に見る態度が培われると推測

される。

不思議現象に対する態度がすべてのクラスタの中間的な位置にある「一般層」の場合は、年齢が上がるにつれて「娯楽的享受」と「懐疑」が低下していることから、成長とともにUFOや超能力といった表層的なエンターテインメントとしての不思議現象への関心は低下する一方で、不思議現象に対して一方的な否定が減少することが推測される。どの年齢層においても「一般層」の割合は4割を占めており、もっとも多いことから、こうした変化が不思議現象信奉の発達の平均的なパターンと考えられる。

不思議現象に親和的な態度を持つのは「不思議現象信奉層」と「娯楽的享受層」であるが、真剣に信奉している「不思議現象信奉層」は、不安や自己認識欲求、ネガティブ情報回避欲求が強く、不安や恐怖に駆られて、あるいは不安や恐怖を解消するために積極的に占いや呪術を求める傾向にある一方、同時に認知欲求も強いことが示されている（小城ほか、2008a）。すなわち、「不思議現象信奉層」は決して盲目的に不思議現象を信奉しているのではなく、幅広く情報を収集して十分に検討した結果、占いや呪術に論理性を認めて信奉的態度を形成したと「自身では」認識しており、このことは、「不思議現象信奉層」に対しては合理的な説得による態度変容が難しいことを示唆している。本研究では、「不思議現象信奉層」においては年齢層が上がるにつれて「占いや呪術嗜好性」も上昇する傾向が認められたことから、こうした傾向が成長とともにより強くなっていくと推測される。

一方、同じく不思議現象に対して親和的でありながら、不安や自己への関心は弱く、対人関係への関心が強い「娯楽的享受層」(小城ほか、2008a)は、不思議現象信奉において年齢層による変化がほとんど見られなかった。「娯楽的享受層」は認知欲求が低く（小城ほか、2008a）、虚記憶を生成しやすい（川上ほか、2008）といった先行研究の知見を踏まえれば、物事に対する真剣な思考を回避して表面的にしか関与しない、主体性の未成熟な集団であることが考えられる。

不思議現象全般に対して否定的な「懐疑層」においては、年齢が上がっても不思議現象信奉に変化は見られなかった。「懐疑層」の不思議現象に対する否定的態度はきわめて強固で、成長とともにパーソナリティの他の側面が発達しても、何ら影響を受けないと考えられる。こうした強固な懐疑的態度は、不思議現象信奉に限らず、物事に対する基本的態度と考えられる。たとえば、「懐疑」の強い人はテレビに対しても情報操作や捏造の可能性を疑う傾向があることが見出されているが（小城，2009b），あらゆる事象に対して懐疑的態度に徹することで高度な関与や精緻な情報処理を避けている可能性もある。

なお、「スピリチュアリティ信奉」、「恐怖」、「霊体験」は、どのクラスタにおいても年齢層による有意差が認められなかったことから、これらの側面においては、青年期前期に形成された態度が強固に維持されることが推測される。ただし、この3尺度については、今回の調査対象者全体に「スピリチュアリティ信奉」が高く、「恐怖」と「霊体験」が低かったために明確な差が見出されなかった可能性がある（後述）。

本研究の問題点と今後の課題

サンプルの特性による限界

本研究では、性別、社会的地位、家庭環境、学力といった社会的属性による影響を排除し、発達のみ焦點を絞って分析するために、カトリックの同系列の中学校・高校・大学で、女性のみを対象として調査を行った。得られた知見は貴重ではあるが、一方で、性別や宗教意識といった点でサンプルの特性による限界もある。性別において、男性はUFOや超能力などの疑似科学、女性は占いや呪術などを信奉する傾向が強いこと（松井，1997；中村，1995；坂田・岩永，1998；田丸・今井，1989）から、今回の調査対象者は相対的に「占い・呪術嗜好性」が高く、「娯乐的享受」が低かった可能性がある。また、女性は男性に比べると不思議現象に親和的ではあるが、その信奉は表面的なレベルにとどまるとする知見（松井，1997など）を踏まえれば、今回の調査対象者においては深慮に基づく真剣な信奉態度

ではなかった可能性も考えられる。

宗教意識と不思議現象信奉の関連は多くの研究で指摘されているが（松井, 1997；水野・辻, 1996；中村, 1995；Rice, 2003；Orenstein, 2002；Tobacyk, & Tobacyk, 1992;など）、宗教意識が不思議現象信奉の規定因というよりは、人間を超えた、超越的な存在を求める心理を共通項としているために不思議現象信奉と高い相関を持っていると考えられる（小城ほか, 2006）。今回の調査対象者はカトリックに親和的なサンプルであるために、たとえば「スピリチュアリティ信奉」が全体的に一般よりも高かったり、すでに強固な態度が形成されていて批判的思考態度の影響を受けにくかったりした可能性もある。

時代背景と世代差

不思議現象信奉を横断的に比較した研究（神館, 2003；松井, 2001）では、高年層よりも若年層の信奉度が高いことが示されているが、これらの研究で扱われている不思議現象は、UFO、宇宙人、超能力、ムー大陸、ネッシー、ナスカの地上絵など、特定の時代に突出したブームが巻き起こったトピックであることから、年代差よりも世代差である可能性が高い。本研究で用いたAPPLEの「娯楽的享受」、「恐怖」、「霊体験」にもUFOや超能力や心霊現象に関する項目が含まれているが、これらの不思議現象が一世を風靡したのは1970年代～80年代であり（小城・坂田・川上, 2007ab）、現代の若年層にとってはなじみが薄いことに留意する必要がある。1995年のオウム事件を経て、破壊的カルトにつながりやすい超能力や心霊現象などの不思議現象はマス・メディアでも自粛されるようになり（小城ほか, 2007a）、また、技術革新によって一般人にもデータ加工が可能になった現代においては、映像や写真の説得力が低下したことによってUFO等の可視化できる不思議現象のブームは終焉したため、2000年代の不思議現象信奉は占いや霊視のように不可視な対象へとシフトしている（小城・坂田・川上, 2008b）。本研究の対象者はオウム事件後の1990年代後半に出生した世代で、明らかに捏造とわかる不思議現象に対しては、どのクラスタも信

奉度が低いと考えられることから、UFOや超能力や心霊現象の項目が含まれている「娯楽の享受」、「恐怖」、「霊体験」においては態度の差が明確でなかったかもしれない。

「懷疑」の再検討

「懷疑」のあり方については検討の余地がある。APPIeの「懷疑」は、「心霊写真にはトリックがあると思う」、「不思議現象はすべて科学で説明できる」といった一般的な表現の項目で構成されており、こうした項目に対して表面的には不思議現象を否定する態度として回答される。しかし、不思議現象を懷疑する態度の内実は、精緻な情報処理を回避した盲目的な否定、マス・メディアが娯乐的に演出したUFOや宇宙人などに特化した限定的な否定、不思議現象信奉を非科学的として揶揄する風潮への表面的な同調、不思議現象の存在を想定した場合の恐怖を打ち消すための反動的な否定など多様な側面があると推測される。本研究においては、「懷疑層」における不思議現象信奉に年齢層による有意差は認められなかったが、現行の「懷疑」尺度には盲目的な「懷疑」と論理的な「懷疑」が混在している可能性があり、今後はこうした多面的な態度をきめ細かく分析することが求められる。

引用文献

Irwin, H. J. (1993). Belief in paranormal: A review of the empirical literature. *The Journal of The American Society for Psychical Research*, **87**, 1-39.

Irwin, H. J. (2009). *The psychology of paranormal belief :A researcher's handbook*. University of Hertfordshire Press.

神館広昭 (2003). 俗信や超自然現象を信奉する要因に関する研究－高校生と高齢者を比較して－ 聖マリアンナ医学研究誌, **78**, 45-62.

川上正浩・小城英子・坂田浩之 (2008). 不思議現象に対する態度と虚記

- 憶生起との関連 不思議現象に対する態度(15) 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 250-251.
- 菊池 聡 (1997). なぜ不思議現象なのか 菊池 聡・木下孝司 (編) 不思議現象 子どもの心と教育 北大路書房 pp. 1-14.
- 小城英子・川上正浩・坂田浩之 (2006). 不思議現象に対する態度の探索的研究 聖心女子大学論叢, **107**, 39-78.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2007a). ブームとしての不思議現象 聖心女子大学論叢, **109**, 35-74.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2007b). 不思議現象とマス・コミュニケーション；レビューと問題提起 聖心女子大学論叢, **108**, 35-69.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2008a). 不思議現象に対する態度；態度構造の分析および類型化 社会心理学研究, **23**, 246-258.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2008b). 不思議現象とテレビ番組；テレビ番組の内容分析と視聴者の反応 聖心女子大学論叢, **111**, 49-95.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2009a). 不思議現象に対する態度における大学生女子と高校生女子の比較 聖心女子大学論叢, **112**, 67-85.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2009b). 不思議現象に対する態度とテレビ視聴；テレビに対する態度尺度の作成 聖心女子大学論叢, **113**, 79-94.
- 松井 豊 (1997). 高校生が不思議現象を信じる理由 菊池 聡・木下孝司 不思議現象 子どもの心と教育 北大路書房 pp. 15-36.
- 松井 豊 (2001). 不思議現象を信じる心理的背景 筑波大学心理学研究, **23**, 67-74.
- 水野博介・辻 大介 (1996). 大学生における宗教意識・オカルト関心と情報行動－理系・文系学生における調査結果の比較－ 埼玉大学紀要(埼玉大学教養学部編) **32**, 1, 1-22.
- 中島定彦・佐藤達哉・渡邊芳之 (1993). 超自然現象信奉尺度の作成 Journal of the Japan Skeptics, **2**, 69-80.

- 中村雅彦 (1995). 大学生のオカルト信仰に関する研究－オカルト信者の社会心理的特性と超心理教育による社会観の変容－ 愛媛大学教養部紀要 (愛媛大学教養部編), **28**, 29-55.
- Orenstein, A. (2002). Religion and Paranormal Belief. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **41**, 301-311.
- Rice, T. W. (2003). Believe It or Not: Religious and Other Paranormal Beliefs in the United States. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **42**, 95-106.
- 坂田桐子・岩永 誠 (1998). 超常現象に対する肯定的信念の形成に関する研究(2)－社会・心理的要因の影響を中心に－広島大学総合科学部紀要 IV理系編, **24**, 87-97.
- 斉藤哲雄 (1981). 日本人の権威主義のパーソナリティに関する研究(1) 社会的属性等との関係について－東京都23区を対象とした調査研究－成城文藝, **95**, 1-42.
- 斉藤哲雄 (1982). 日本人の権威主義のパーソナリティに関する研究(2) 天皇に対する態度と権威主義のパーソナリティ－東京都23区を対象とした調査研究－成城文藝, **98**, 1-34.
- 田丸敏高・今井八千代 (1989). 青年期の占い指向と不安 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学, **31**, 225-260.
- Tobacyk, J.J. & Tobacyk, Z.S. (1992). Comparisons of Belief-Based Personality Constructs in Polish and American University Students: Paranormal Beliefs, Locus of Control, Irrational Beliefs, and Social Interest. *Journal of Cross-cultural Psychology*, **23**, 311-325.
- 戸田有一・南 耕治 (1993). 中学生の占い指向と自己効力 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学, **35**, 513-526.
- 渡辺雅子・榎本貞保・松本 啓 (1980). 「占い遊び」を契機として発症した心因性精神病について 精神医学, **22**, 1343-1348.